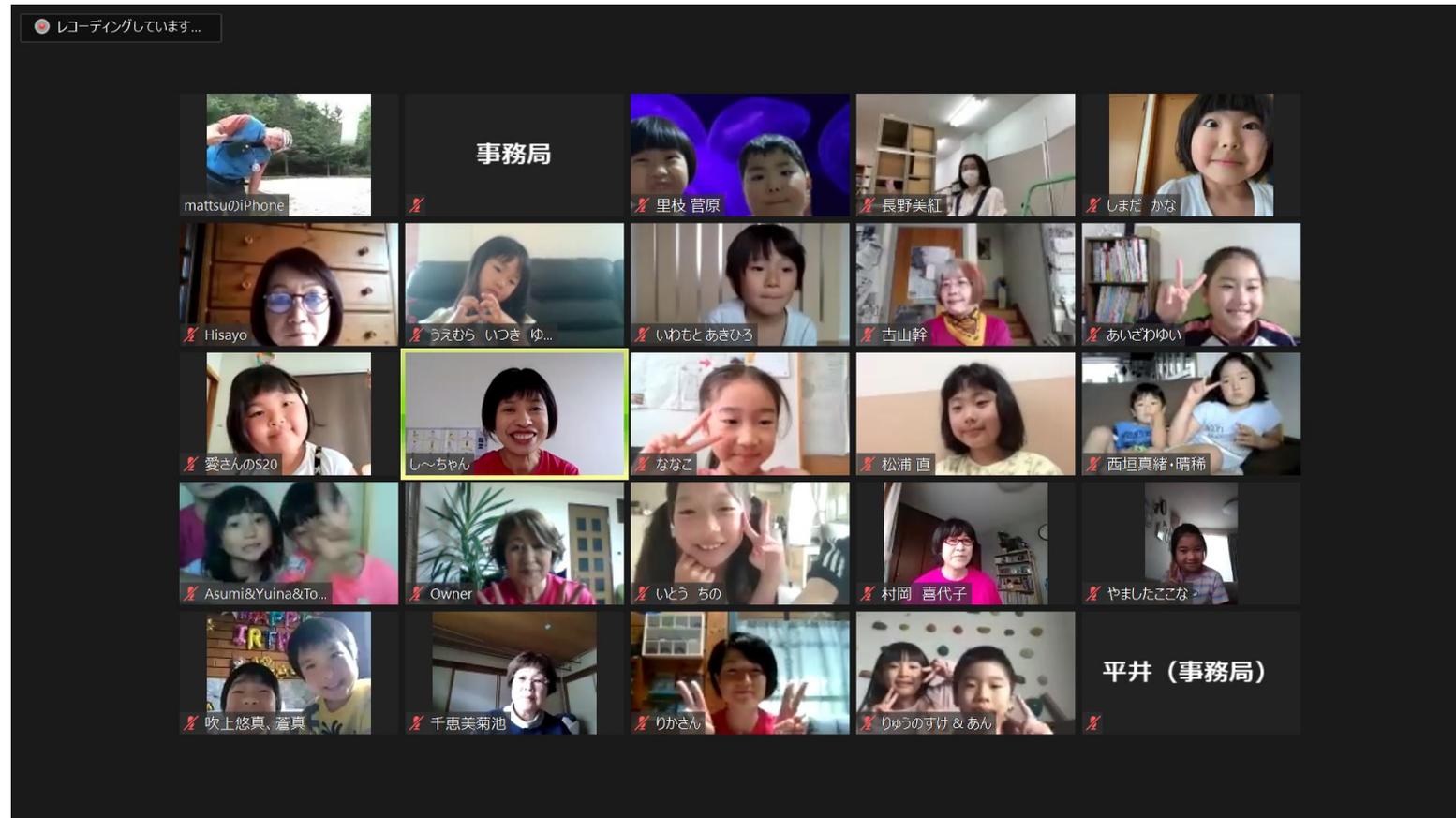


かしわのもりの活動報告 「ここから実験室」



特定非営利活動法人かしわのもり 松山なつむ



かしわのもりの理念とは（理念に基づくサービス提供）

理念①

ケアのための美しい環境を提供する



理念②

看護師・保健師だから活動創出を支援



理念③

まち化するプロセスを重視



- 1 代表は小屋大工
- 2 小屋のような空間の心地よさを重視
- 3 風景に馴染む建築がケアに欠かせない

- 1 現場統括は看護師・保健師
- 2 シニアの暮らしに医療・看護の原点がある
- 3 生きる力を高めこと

- 1 地方の未来の福祉は、人の「ちょうどいい」に寄り添う
- 2 まちを福祉施設に取り込む

北海道、十勝、鹿追町とは



地理



北海道は14地域に分かれ、十勝が最も広い面積を有する。平地が多く、1次産業が盛ん。食料自給率は1220% (2020年) 標高2000m級の日高山脈を越えなければ、札幌等の主要都市へ行くことができない。

歴史



北海道は、屯田兵と呼ばれる公務員が開拓したエリアと民間会社が開拓したエリアがある。十勝は民間が開拓したエリアであり、民間が中心となって新しいことを創出する文化がある。

風土

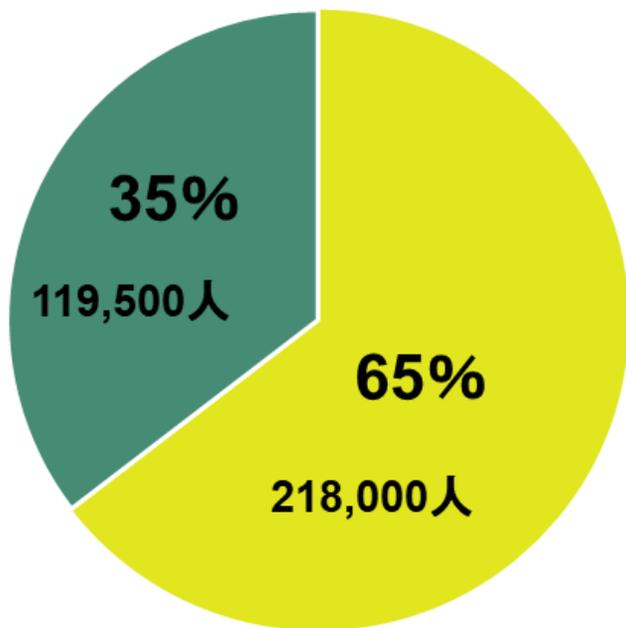


地理的条件と歴史から、十勝というエリアの中で経済が循環し完結する風土がうまれた。十勝モンロー主義と言われ、経済だけでなく、医療・福祉も同様に市町村単位ではなく、オール十勝でまとまることの強さがある。

十勝の人口、訪問看護・相談支援事業の範囲

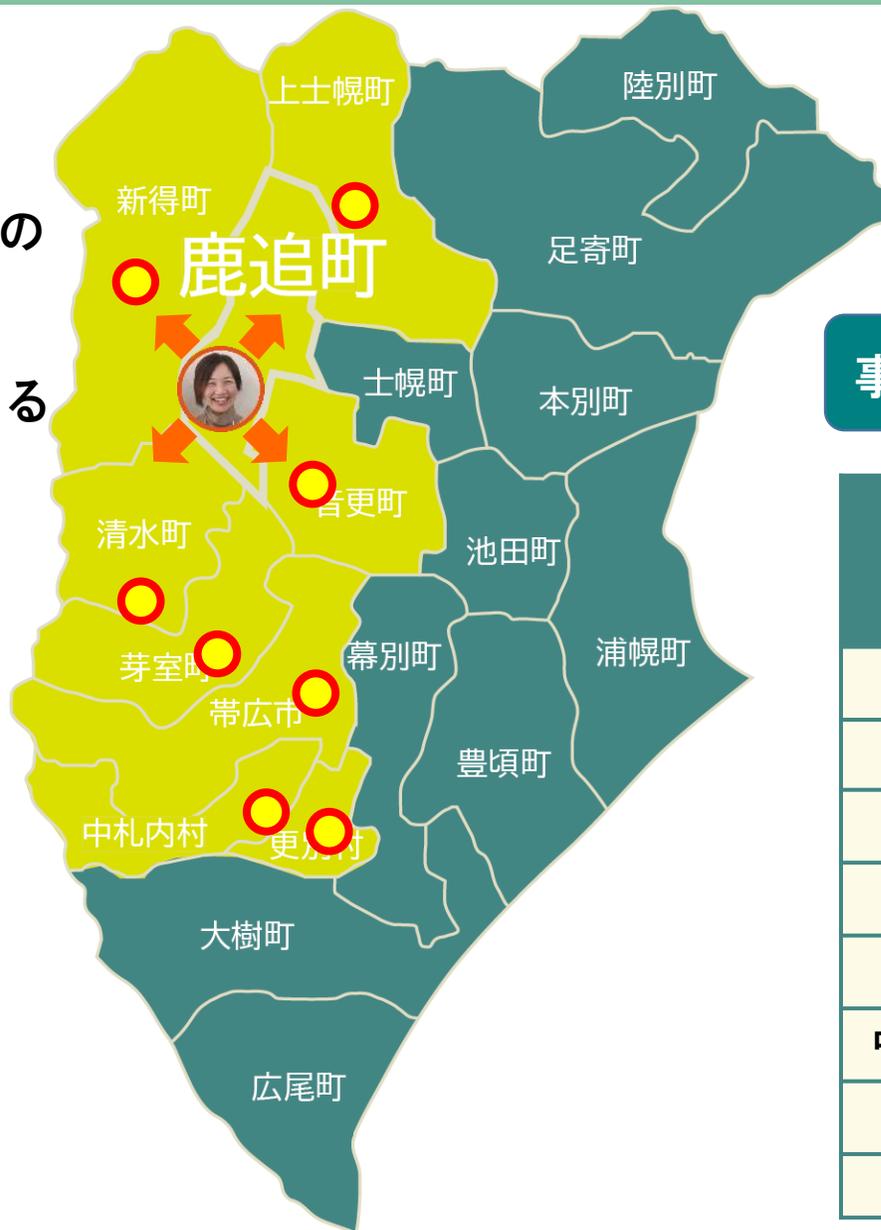
人口

十勝（19市町村）
337,500人



訪問範囲

訪問自治体の
総人口は
十勝全体の
65%を占める



事業連携

	連携機関		
	医療機関	福祉機関	保育園 小学校
鹿追町	2	3	1
新得町	2	4	
清水町	3	3	
芽室町	4	9	3
更別村	1	4	
中札内村	1	4	1
帯広市	13	10	
士幌町	1	1	

訪問看護ステーションかしわのもりとは

訪問看護ステーションの特徴

へき地
医療

母体は
NPO法人

2021年で
設立19年

正会員：個人26名 加盟団体：日本看護協会 日本訪問看護財団

訪問看護ステーションのスタッフ

保健師
3名

看護師
3名

社会福祉
士1名

大工
1名

ここから
実験室
2名

new

管理栄養士
1名

new

言語聴
覚士1名

訪問看護ステーションの取り組み実績

①サービス利用者数

- ・北海道小児等在宅医療連携拠点事業地域拠点事業
- ・訪問看護事業
- ・相談支援事業

登録者数
85名

延べ人数
400名

②地域活動、講座、ワークショップ等の参加者数

- ・医療的ケア児の在宅生活を推進する活動
- ・その他 講演、ワークショップ等
- ・発達障害の子どもたちとご家族への支援
- ・ケアカフェとここから実験室
(まちの拠点づくり事業)

延べ人数
250名

本事業の対象者とサービスを提供する範囲とは

医療的ケア児

医療的ケア(人工呼吸器・経管栄養・吸引等)が必要な子どもや、発達障害の子どもとその家族を対象



個性のある子どもたち

「早い遅い」「できるできない」などで子どもを評価するのではなく、一人ひとりの「強み」を追求



ここから実験室において、最も大切なのは、

そのまま

「そのまま」を実現する3つの支援

活動1

「できる・できない」「遅い・早い」だけを切り取らず、成長過程に目を向ける

活動2

孤立しやすい女性や暮らしづらさを持つ人も、楽しみが持てるプログラムを考える

活動3

「レンガの家」が地域の方にとって入りやすい場となる

活動1

子ども達の成長過程に目を向ける



- ・ 2019年度から鹿追町の子ども達（発達障がい）を対象とした独自事業
- ・ 2020年度から休眠預金を活用（2022年まで活用）
- ・ 就学前から2年生を対象に年に5～6回、約25名に体験型プログラムを提供
- ・ かしわのもりと共に活動を運営するボランティア団体「ココから隊」誕生



活動2

孤立しやすい女性や生きづらさをもつ人と楽しみを共に

はじまる前から構想を語りあい、
夢をふくらませて、そのまま活動をはじめる

①プロジェクトデザイン

かしのもりスタッフと
場を開くための準備



②プロジェクト説明・意見交換会

予算もないのに
あつらいいなを語り合う



③活動を開始！

もう活動がスタート、あふれるやる気

環境整備班

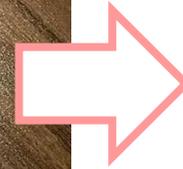
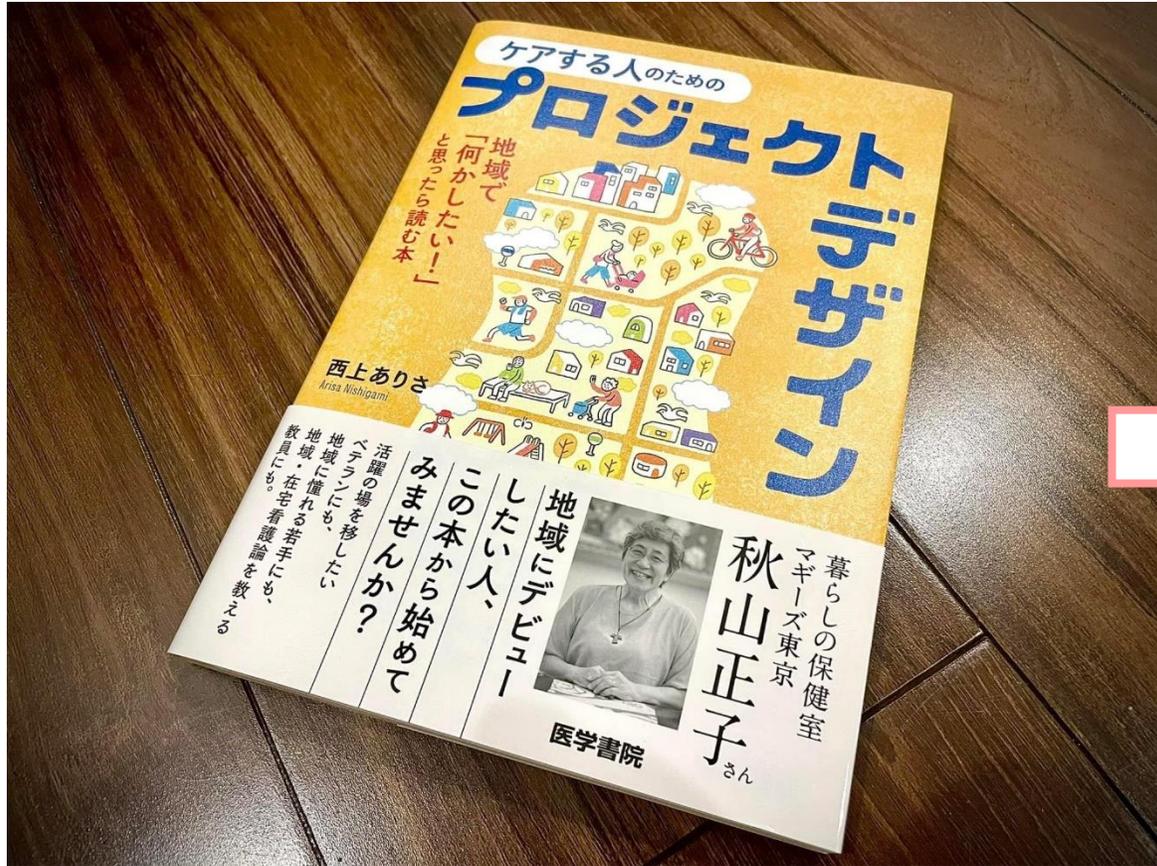


活動2

孤立しやすい女性や生きづらさをもつ人にも楽しみを

まずは地域を歩いて、生の声を聞き

未来志向型で「鹿追町がこうなったらいいな」とことん考えた



2020年度に四苦八苦して取り組んだ一コマが
西上ありささん著の本にも掲載されました

この過程を2021年度は
地域の方と!

活動3

「レンガの家プロジェクト」

資源が限られる地方だからこそ、建築もランドスケープも
構想時点から場を開き、気持ちの敷居を下げる



まち化する福祉施設

レンガの家 - 北海道農道町 -

農村風景への接続

北海道一帯に十数年前に位置する人口5千人の農道町は田舎風景が広がり、暮らしと農耕が失われている。本プロジェクトでは地場産物を中心にカフェやライブラリーを併設し多機能で複合的な福祉施設を地域に開き提供するが、新たな施設「レンガの家」をつくる必要がある。広部のあり方は、既存建物を活用し、その基礎を大規模とすることで多くの機能が共有し合う。更にレンガの家の周囲にある農村風景の景観内蔵を以て、既存建物を千草の草葎を利用して家のデザイン、緑のグリーン、カーブスガーデンを併設し、一部内蔵駐車スペースには高なる住宅を敷地内に共有することで地域の景観的価値、自然生態上価値のグリーン化を促進し、また土地の価値を高め、地域に見られる修繕や素材をレンガの家に結びつけることで地域の人口に受け入れられる集約の存在として農村風景への接続を試みる。



農道町に築かれた福祉施設や学校となったレンガの家、解体された牛舎の基礎も活かめられたスケープを完成させ取り戻すことで地域の価値を高め、更に新しい生活スタイルや素材の活用、レンガを家の中に埋め込むことで、農村風景への接続を試みる。



既存建物を大規模と解体で使われることで内部と外部のプランニングが生まれる

既存の建物を解体した地帯のキッチンダイニングが農と食をつなぐコミュニケーションを促す

地帯に置かれた2Fアトリエ・ワークスペース・ライブラリーに農家の主婦や地域の子どもたちが集まる

北風の風障壁の役割を担う南面採光の縁側では大きな窓から四季や風景の移り変わりを感じ、福祉と日常生活が共存する公共性の高い場が創られたことを意識している

■ 農道町 / 都市と農村の境界

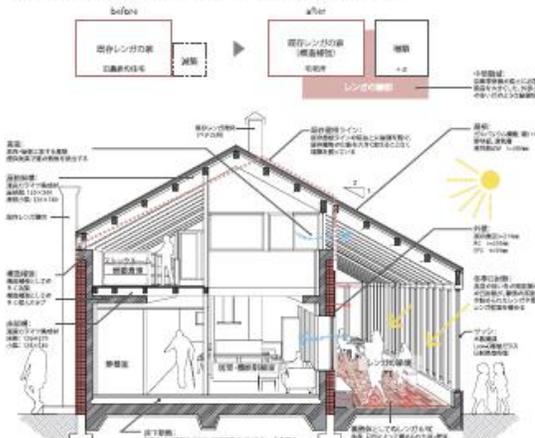


- 自然**
 - 豊かな自然環境
 - 四季折々の風景
 - 農業と自然の共生
- 文化**
 - 伝統的な文化
 - 地域の歴史
 - 農業の文化
- 産業**
 - 農業
 - 観光
 - 福祉

■ 農村風景への接続 / 土地の記憶を継承しまち化する施設



■ 亜寒帯気候の緩和(中間領域) / 気候風土に合わせてリノベーション



■ 開かれた施設 / 福祉施設と日常生活のあいだ

